

ギコンくん
が
いく

高橋是清翁の胸像 ~コレじいさんのひみつ~



こんにちは、ギコンくんです。このコーナーでは、特許庁での気になるトピックを紹介しています。今回は、特許庁ロビーの顔である高橋是清像の製作秘話をお届けします。

おっ、戻ってきたようじゃのう。發明音頭はどうじゃった？
「あ、コレじいさん。時間が掛かりましたが、お陰様で何とか歌って踊れるようになりました。どうもありがとうございます」

ほっほっほ。ワシも動ければ一緒に踊ってやれるのじゃのう。むやみに動かぬのが一流の彫刻としてのたしなみじゃ。

「確かに、胸像がウロウロしていると特許庁七不思議と囁かれてしまいますね。自由に動けないのは大変ではないですか？」

作られてから70年以上もこうしておるので、もう慣れたものよ。そうじゃ、お主。特許庁の公式マスコットキャラの座を狙っておるのなら、庁内の雑学も学ぶ必要があるじゃろう。そういう訳でワシの背中をちょっと見てみなさい、ほれほれ。

「突然ですね…。えっと、背中、背中…。パテッ！何か文字が刻まれていますね。でも私には読めない漢字もあります。えーと、「盛岡勇夫」はコレじいさんを作られた芸術家のお名前ですか？ それにしても「發明者」って…」



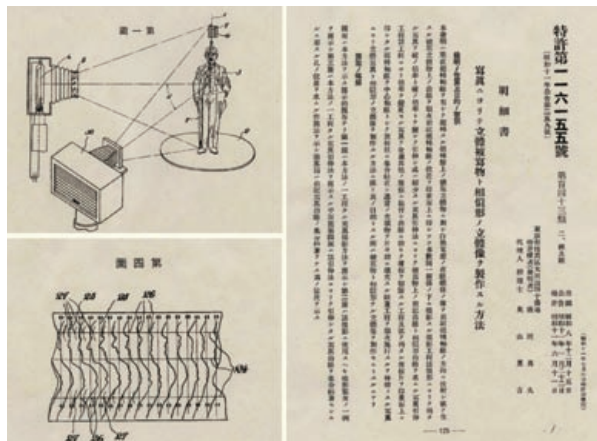
ほっほっほ、不思議じゃろう。文字自体は、「立體寫真像 發明者 盛岡勇夫作」と刻まれており、「立體寫真像」は「りったいしゃんぞう」と読む。これにはワシの誕生秘話があるのじゃが、どうじゃ聞いてみたいかの？

「はい、気になります。聞かせて下さい！」

実はのう、ワシは初代特許庁長官である高橋是清翁の胸像なのじゃが、背中に書かれておる盛岡氏の發明を使って、昭和9年の特許法施行五十周年記念行事にて作られたのじゃ。この發明は、当時非常に精巧な彫刻が作れるものと評判で、新聞で取り上げられたこともあるのじゃ。例えば、神戸又新日報(1934.10.25(昭和9年))では、『真に生き写しの姿を造り出せる』、『正に發明王国ニッポンの素晴らしい威力の發明』、『日、英、米、仏、独五ヶ国の専売特許を獲得し内外の賞賛的となるに到った』、と賞賛されておったのう。多くの国内外の著名人もこの發明を利用して彫刻を作っており、その中にはリンドバーグ大佐やヘレンケラー女史も含まれていたそうじゃ。

「パテッ！びっくりです。コレじいさんはただの美術品じゃなく、特許庁に相応しく發明も関係していたのですね！」
ふふふ、どうじゃ驚いたじゃろう。その發明を記した公報は、特許第116155号明細書と言われている。ほれ見てみるか？ 古いだけあってなかなか味わい深い公報になっておるぞ。

「へーっ、これが」



この發明は多数の角度からモデルを数秒で写真撮影し、その多数の写真の輪郭線の情報から精巧な彫刻を作る。モデルに長時間我慢して貰って感覚的に模写するのに比べ、早くて正確じゃ。芸術と科学技術の融合と言えるじゃろう。「自分のキャラクターグッズが作られることは夢見てましたが、美術品として後世に残り続けるのにもロマンを感じてきました。私も公式マスコットキャラになったら、精巧な銅像を建てて貰いたいです」

ふむ。もし作ることがあれば、お主の場合はもう少し男前に作って貰った方が良いのではないかと？ ほっほっほ。

(文：特技懇編集委員会)